
素直にSAY !

浅葱秋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直にSAY!

【Zコード】

Z0177C

【作者名】

浅葱秋水

【あらすじ】

素直になれない主人公と、男勝りな彼女との物語。
笑いあり？涙あり？

彼女の美奈と喧嘩した。きつかけは些細なことだった。ただ、友達の女の子の荷物を持つてあげただけ。その光景を見た美奈は俺の水月に見事な突きを放ち、去っていったのだ。それから、会う度に色々と言い合いになってしまった。

「流石は狂犬だな」

俺は一人、公園のベンチに座りながら、ポツリと呟いた。“狂犬”とは美奈の名字の“犬神”と凶暴な性格から考えられた、あだ名である。

桜が舞い散る公園では老人達が談笑しながら、ゲートボールを楽しんでいる。子供の姿は全く無い。

「少子高齢化の影響かな」

俺は空を見上げ、眺める。空に次々と美奈との思い出が浮かんでは、消えていく。かなり重症だな、俺。

「そこまで惚れてるってことか」

切れ長の瞳、遠慮無く喋る男口調の透き通るような声、長い栗色の髪、スレンダーな体、男勝りな性格、全てが愛しく思ひ。けど、素直になれない。好きだと言えない。

「はあ」

空に映る（もちろん俺にしか見えない）美奈とのスライドショーを見ながら、俺は溜息を吐いた。

「どうしたんじゃい、坊や？」

老人特有の寂声が響き、俺は視線を空から降ろした。いつの間にか、俺の隣りに小柄なおばあちゃんが座っていた。

俺は高校三年だが、このおばあちゃんから見れば坊やなのだろうか。「ちょっと彼女と喧嘩してしまって」

俺は苦笑を浮かべ、おばあちゃんの皺だらけの顔を見た。

「ふむ。若い時には良くあることじゃな。ワシにもあつたわ」

おばあちゃんは皺だらけの顔に、よつこいつを皺を増やし、懐かしむような優しい笑顔を浮かべた。

「素直になれないんですね。好きなのに、言葉にして伝えられないんですよ。言葉にしなくても伝わると想っていて、それがいつの間にか当たり前になつてたんです」

気付いたら、全てを話していた。おばあちゃんの持つ優しい空気のお陰なのだろうか。

「確かに言葉にしなくても伝わっているかもしけんな。しかしながら、言葉にするだけで色々と変わるもんなんじやよ」

「でも……今更言つのも恥ずかしいんですね。何と言えば良いか分からないです」

今更自分の気持ちを言葉にして美奈に伝えるなんて、恥ずかしい。恥ずかしすぎる。それに言ひべき言葉が分からない。

「何も恥ずかしげることも、難しいことでも無い。ただ、自分の想つたことをそのまま格好つけずに言えば良いんじやよ」

おばあちゃんはそこまで言つと、仲間に呼ばれたみたいで「よつこじょ」と立ち上がった。

「とにかく、素直にじやよ」

老人はゲートボールに使うハンマーのようなものを杖代わりにしながら、ゆっくりと仲間の元へと向かつていった。「素直に、か」空を見上げてみると、既にスライドショーは終わったのか、綺麗な夕焼けの色が拡がつていた。

「良し!」

俺は勢い良く立ち上がり、携帯電話を取り出した。

携帯電話のアドレス帳のトップにある彼女の名前を選び、電話をかける。

「もしもし」

電話の呼び出し音が切れ、俺の大好きな透き通る声が背後から聞こえた。

振り返ると、そこに携帯電話を耳にあてている美奈の姿があつた。

「えつ」

俺は携帯電話を切り、ポケットにしまいながら美奈を見る。美奈は少し照れたような笑みを浮かべると、俺同様に携帯電話をしまった。

「……」

「……」

無言で見つめ合つ俺と美奈。

素直に。自分の想つてることを素直に言えば良いんだ。必死に自分に言い聞かせるも、なかなか言葉が出来来ない。

それにもしても、俺が無言なのはともかく、何で美奈まで無言なんだ。まさか、かなり怒つてる? 「ごめん」

「スマン」

とりあえず謝つておこつとした俺の言葉と、美奈の思いがけない謝罪の言葉が重なつた。

俺は頭を下げている為、美奈の表情は見れないが、本気で謝つているようだつた。

顔を上げると、美奈は照れたような表情でこちらを見つめていた。「こっちこそごめん。俺……」

「いや、悪いのは私だ。すまない。拓也はただ友達の女の子を助けてただけなのに、怒っちゃつて」

美奈のその照れたような表情がとても綺麗で、愛しく想えた。俺は俺とあまり変わらない長身の美奈をギュッと抱き締めた。

「えつ」

美奈は俺の中で驚いたような声を短く漏らした。

「……好きだよ、美奈。誰よりも、好きだよ」

「拓也……私も好き」

俺達はそのまま抱き合つていた。

しばらくすると、周りから拍手の嵐が沸き起つた。

驚き、辺りを見回してみるとゲートボールをしていた老人達が、いつの間にか俺達の周りを囲んでいた。その中にはアドバイスを

くれた、あのおばあちゃんもいる。

俺は美奈を抱き締めたまま、そのおばあちゃんへと笑顔を向けた。するとおばあちゃんは、あの皺だらけの優しい笑顔を浮かべた。

「あり……ぶへらああつ」

「恥ずかしいんだよ！」

俺のおばあちゃんへのお礼の言葉は、真っ赤な顔をした美奈の右拳によつて遮られた。

殴られた顔を撫でながら、俺は美奈を見つめた。蛸のように真っ赤に顔を染めた美奈も、やつぱり可愛らしく、愛しい。“狂犬”なんてあだ名が似合わないほどに。

「見つめすぎなんだよ！恥ずかしいんだよ！」

「ぶへらああつ！」

訂正します。やっぱり、美奈は“狂犬”というあだ名はピッタリ。老人達の暖かい笑い声が、俺達を包み込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0177c/>

素直にSAY！

2010年10月8日15時55分発行